

博士学位論文審査要旨

2021年2月2日

論文題目： 生を縁取る言葉の居場所―戦後沖縄における「島ぐるみ」土地闘争の再検討―

学位申請者： 岡本 直美

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 富山 一郎
副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 太田 修
副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 村田 雄二郎
副査： 沖縄タイムス社記者 謝花 直美

要 旨：

岡本直美氏の学位申請論文は、戦後沖縄の復帰運動史の出発点に位置付けられている1950年代の「島ぐるみ」闘争を再検討することにより、沖縄戦後史を、自治と移動の視点において描き直そうとするものである。またその際、「島ぐるみ」闘争の起点として議論されてきた伊江島の土地闘争に焦点が当てられている。全体は、序章と終章を入れて全八章で構成されている。以下その内容と審査の報告を記す。

沖縄戦後史研究は、新崎盛暉に代表されるように1972年の日本への「復帰」を軸とした政治史研究として議論されてきた。そこでは反基地運動が重要な焦点になり、基地建設のための土地取り上げに抵抗した1950年代の土地闘争である「島ぐるみ」闘争も、こうした文脈において位置づけられてきた。しかし近年、鳥山淳の研究にみられるように、自治の形成として沖縄戦後史を検討する研究が登場してきている。そこには「復帰」という国家への帰属とは異なる沖縄の自治や独立というモーメントを、沖縄戦後史から浮かび上がらそうとする問題意識がある。岡本氏はこうした問題意識を受け継ぎながらも、こうした自治や独立というわく組の底流にある人々の自治意識とでもいべき領域と、その意識の底流にある、沖縄戦の後を生き延びてきた人々の生の軌跡に注目する。またその生の軌跡において、移動という問題も射程にいれようとしている。

こうした岡本氏の沖縄戦後史へのアプローチには、生き延びるという主体的営みがいかなる言葉において表出するのか、またこうした自らを語る言葉がいかに「わたしたち」という主体形成と結びついているのかという問いが、据えられている。論文において何度も登場する「命どう宝」という言葉には、かかる重要な問いが込められているのであり、また表題の「生を縁取る言葉の居場所」とは、かかる問題意識をあらわしているのである。以下審査において確認された、各章の内容とその意義を述べる。

第一章では、謝花直美氏ならびに平松幸三氏の研究を綿密に検討しながら、移動という経験から土地闘争を考えようとしている。すなわち土地闘争の背後にある土地への思いが、しばしば農民の土着性や村という農村共同体から説明されるのに対し、岡本氏は土地闘争の底流に移民や出稼ぎの経験があることを指摘する。すなわち土地への思いは、土着性ではなく、移民や出稼ぎの経験に内包される生き延びてきたという記憶と共にあるのだ。こうした岡本氏の視座は、沖縄研究における移民・出稼ぎ研究と沖縄戦後史研究を、横断する試みでもあり、また移動の経験が、戦後を生き延びる生の軌跡と重なっていることが、説得的に主張されている。

第二章と第三章では、伊江島の土地闘争を、土地の接收前と後に焦点を当てながら考察している。接收前を扱っている第二章においては、交渉の手続きすら存在しない状況の中で、話し合いという言葉の領域を創造し、その交渉の主体として自らを立ち上げ構成していくことが、土地闘争の主題として描かれている。すなわち、何を交渉するのかではなく、交渉という領域を切り開いていくこと自体が政治なのである。またしばしば伊江島の土地闘争は非暴力という言葉で語られるが、岡本氏は、暴力か非暴力かではなく、暴力に晒される状況の中で、言葉による交渉という領域を切り開いていったという点にこそ、伊江島の土地闘争の重要な意義があるとする。

だがこうした交渉も、軍隊による土地接收により破綻していく。第三章では接收後の展開の中で人々が、自らの主体を被接收者から被救済者へと再構成していくプロセスが描き出されている。岡本氏の言葉を借りれば、「軍用地問題」から社会政策的な「社会の問題」への転換である。そしてそこで重視されているのは、交渉の決裂でもなければ暴力的な鎮圧ということでもなく、生き延びるために主体を絶えず構成し続けるという人々の営みである。またかかる視点から土地闘争をとらえるならば、土地接收において闘争は終結するのではなく、生き延びるための「わたしたち」を構成し続ける運動として、継続することになる。かかる岡本氏の土地闘争の沖縄戦後史における位置づけに、他の研究では見られない独創性があるといえるだろう。

第四章と第五章は、こうした主体を構成していく営みとして 1950 年代以降の展開が、運動の継続として考察されている。具体的には第四章では、「伊江島土地守る会」が取り上げられ、そこにおける学習活動が検討されている。また第五章では、こうした学習活動と重なる形でつくられた「わびあいの里」ならびに「反戦平和資料館」が検討されている。こうした空間は、運動の記憶の場として学習活動を支えると同時に、さらなる交流の場としても存在している。またこうした記憶において沖縄戦の経験が軸になること、またさらに記憶が単なる歴史資料ではなく、沖縄戦を生き延びてきた一人ひとりの軌跡を確認し語りあう記憶の場としてあるということが、明らかにされている。この第四章と第五章でとりあげられるのは、岡本の言葉を借りればポスト「土地闘争」の時期であり、この時期において、伊江島の運動は復帰運動から離れていく。まただからこそ伊江島の土地闘争を復帰運動の源流として位置づける従来の枠組みにおいては、このポスト「土地闘争」の時期は、ほとんど重視されることがなかった。しかし岡本氏は、沖縄戦の後を生き延びてきたという一人ひとりの生の軌跡から、「わたしたち」という主体をどう言葉において語るのかという視点において土地闘争をとらえているのであり、かかる視点からはポスト「土地闘争」における学習活動や記憶の場を作ることは、運動の継続として考察されることになるのである。

最後の第六章では、このような主体を形作る営みにおいて研究の果たす意味を内省的にとらえようとしている。そこで議論の焦点に据えられているのは、「わびあいの里」の代表理事であり「反戦平和資料館」の館長でもある謝花悦子氏である。伊江島の土地闘争はこれまで、阿波根昌鴻を中心に研究されてきた。また運動における主体性は、阿波根の思想において考察され語られてきた。これに対し、岡本氏は主体性を考えるには、阿波根昌鴻という中心人物においてそれを代表するのではないアプローチが必要だとし、現在伊江島の土地闘争の語り部として活動する謝花悦子氏と「台所」という場所に注目する。また謝花悦子への密度の高い聞き取りから、こうした主体を形作る営みに対して研究はいかなる関係を結ぶことができるのかという問いを、内省的に考えようとしている。

審査では、生き延びるということの底流にすえられている「飢え」と、沖縄島北部における沖縄戦の体験として登場する飢餓の記憶がどのように関連するのかということについて議論になった。また岡本氏自身が登場する最後の第六章と他の章との関連性、「言葉の居場所」という表現や移動の定義についても質問があった。しかしながらこうした疑問や指摘は、申請者の将来性への期待でもあるということも確認され、論文審査委員会は、岡本直美氏提出の学位申請論文を、博士（現代アジア研究）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

総合試験結果の要旨

2021年2月2日

論文題目： 生を縁取る言葉の居場所—戦後沖縄における「島ぐるみ」土地闘争の再検討—

学位申請者： 岡本 直美

審査委員：

主査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	富山 一郎
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	太田 修
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	村田 雄二郎
副査：	沖縄タイムス社記者		謝花 直美

要 旨：

岡本直美氏提出の学位申請論文にかかわる総合試験を、2021年2月1日（月）の15時から16時半まで行った。岡本氏の専門分野である沖縄近現代史ならびに歴史学にかかわる専門知識について、審査委員が試験をし、十分な知識があることが確認された。また必要とされる語学（英語）の能力についても質疑がなされ、十分な能力があることが確認された。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目：生を縁取る言葉の居場所—戦後沖縄における「島ぐるみ」土地闘争の再検討—

氏名：岡本 直美

要旨：

本論文は、沖縄戦後史研究の中で、復帰運動や反戦平和運動の起源として位置づけられる伊江島土地闘争に注目する。そして、起源として扱われるにもかかわらず、実証性に乏しい伊江島土地闘争の具体像、及び新たな運動像を実証的に考察することを目的とする。さらにそれは、《伊江島土地闘争→「島ぐるみ」闘争→復帰／反戦平和運動》という構図の中で、自治や運動を論じてきた沖縄戦後史の枠組みそれ自体を再検討する作業でもある。

戦後、米軍の統治下に置かれた沖縄では、米国による恒常的な基地建設が進められた。それに伴い各地で米軍による強制的な土地収用が実行された。このような米軍統治に対する抗議運動が起こり、「島ぐるみ」の土地闘争（1956年）という全沖縄的な軍用地反対運動へと発展した。沖縄戦後史において、この「島ぐるみ」闘争は復帰運動の前史と位置づけられ、沖縄社会全体による米軍統治反対運動の起源を指す。この「島ぐるみ」闘争の発火点の一つが伊江島土地闘争と認識され、沖縄の自治や土地闘争を論じるうえで重視されてきた。

本研究の特色は2点ある。1点目は、空間や場所から土地闘争を考察することである。従来、土地闘争は「住民」や「農民」の土着の問題として論じられてきた。それに対して本研究では、沖縄に生活する人びとの流動性を踏まえたうえで、土地や建物に蓄積された記憶を注視し、土地闘争を再検討することを試みる。

2点目は、運動から人びとの「自」を探る視点の再構築である。運動を成功／失敗という視点で分析するのではなく、暴力に日常を囲まれた人びとによる言葉と言葉の空間の生成過程に注目する。そのような言葉と空間を創造する作業は、「自分たち」あるいは「わたしたち」をいかに形成するかという作業でもある。このような視点から戦後の沖縄における自治を言葉の居場所の問題として再検討する。言葉の「居場所」としたのは、人びとから発せられた声が言葉として顕在化できる場、留まることのできる場を考察するという目的を強調するためである。伊江島土地闘争は、発信されたその言葉の豊かさゆえ、従来の沖縄戦後史研究でも重要視されてきたが、人びとの生活を実証したうえで言葉を検討するような研究は途上にある。したがって、言葉の「在処」とは区別するために「居場所」を用いた。それは、政治史や国際関係史的な関心から伊江島土地闘争を事例研究として分析するのではなく、人びとの具体的な日常的実践の地平から軍用地に関わる暴力を検討するものである。

本論文は大きく「島ぐるみ闘争」前と後の時期に区別して構成されている。第1章から第3章では、「島ぐるみ闘争」前の伊江島土地闘争（1953—1955年前半）を取り上げている。当該時期の伊江島土地闘争は、沖縄戦後史研究において最も注目され、闘争の意義が論じられてきた。しかしながら、伊江島そのものを分析するというよりは、「島ぐるみ闘争」という民衆運動の系譜を整理するために説明的に用いられてきた傾向にある。しかしながら確かに全沖縄的な反基地闘争の重要な発火点の一つでありながらも、伊江島土地闘争は沖縄本島における他の接收地とは異なる特徴を抱えながら運動を展開した。つまり、直截的に言えば、実証性を欠いたまま伊江島土地闘争は評価され、沖縄の民衆運動の一つの源流として位置づけられてきた。

したがって、前半部分の第1章から第3章は、これまで重要視されながらも象徴化されるに留まっていた1950年代前半の伊江島土地闘争を実証的に分析し、伊江島土地闘争の意義を再検討

する。これは、伊江島土地闘争の独自性を追究して沖縄本島との差異化を図るというよりも、伊江島の被接收者たちがなぜ沖縄本島の人びとと繋がることができ、「島ぐるみ」で米軍基地反対を訴えるまでの「わたしたち」という関係（集団）を持つまでに至ったのかを再検討する作業である。

第1章は、人びとの移動経験と土地闘争との関わりから沖縄戦後史研究の方法論的検討を行っている。従来の認識において伊江島土地闘争は土地に根差した農民による闘争と位置づけられてきた傾向にある。そのような従来の認識を乗り越えるため、本章では運動主体の移動経験に注目した。戦前から移民や出稼ぎ者が多く、さらには深刻な地上戦を経験した沖縄では、定住を前提に人びとの生を捉えることが難しい。伊江島の土地には住民の多様な移動経験が重ねられ、土地闘争時に各々の移動経験が参照され運動に反映される点が特徴的である。そのため、固定的に認識される傾向にある「土地」と、流動的な「人びとの生（移動経験）」を同時に検討するような方法論が必要となる。このように、地域誌や移民史の枠組みだけでは捉えきれない人びとの移動経験（ライフヒストリー）から土地闘争の意義を明らかにすることで、従来の土地闘争史や移民史研究、自治研究に新たな視座を提示するような方法の検討を行った。

第2章は、土地収用が潜在的な問題である時点において、住民たちがいかなる政治の場を構築したのかを検討した。本章で重要な視点の一つは、「非暴力の抵抗」とは何かを考えることである。伊江島の抵抗方法が評価されるときに重要なのは、その抵抗が非暴力的であると名付けることではなく、暴力と言葉との関係を考えることである。軍用地収用の補償制度が未整備で、陳情する窓口がない暴力に支配された日常において、殺されないために自己を縁取る言葉の場を構築しようとする人びとが立ち上がる過程を微細に検討した。

第3章は、土地収用が現実の問題となった後の伊江島土地闘争を扱っている。接收前後で決定的に異なるのは、「生きる」という語を被接收者が全面に提示した点である。暴力の事後においては、毎日を生きるという最重要課題を根拠として生活補償が折衝された。伊江島の声が沖縄に住む他の住民へと広がる一方で、強制的な土地収用の問題は「軍用地問題」としてではなく「社会の問題」として扱われるよう変化した。つまりそれは、被接收者を被救済者とみなす政治へと変化する状況だった。

後半部分の第4章から第6章では、ポスト「島ぐるみ」闘争における運動がいかに生成されつづけてきたのかに関して、伊江島土地闘争における「学習」行為や反戦平和資料館から検討する。伊江島土地闘争は「島ぐるみ」闘争へと繋がる時点では、自治的意志を自ら言語化する言葉の空間をつくり出した。そしてポスト「島ぐるみ」闘争では、そのような自治を語る空間はいわゆる「復帰運動」の外で生成され続けた。

復帰運動史において自治は重要なキーワードであり、伊江島土地闘争では生活者の立場から自治的意識が提起された点が注目されてきた。しかしながら伊江島土地闘争を復帰運動（1960年代後半～）の源流と位置付ける従来の沖縄戦後史の枠組みでは、1960年代以降の伊江島の運動を捉えきれない。

「伊江島土地を守る会」はかつて復帰運動の中核とも関わった重要なアクターであるが、復帰運動研究の主軸からは当会の姿は見えてこない。そこで、復帰運動の実相を明らかにするためにも1950年代の土地闘争の延長に1960年代以降の運動を捉える必要がある。土地闘争が生活の場でいかに生成され続けてきたのか、1960年代以降の運動経験の実証、およびパーソナルな領域から運動を実証する必要がある。

そこで第4章では「伊江島土地を守る会」に注目し、該当時期の運動経験を「学習」行為から考察する。「島ぐるみ」闘争後、住民という枠では運動が集団をつくるのが困難になり、当会は積極的に本土の支援者との交流や、後継者の育成（東京・中央労働学院や京都・一燈園に派遣）に努め、自分たちで学習会を開くようになった。当会の「学習」は、新たな知識を得るという意味以上に、自分たちの運動を自己把握し、事後的に意味づける作業としてあった。同時に学習は、

運動を継続する場を確保する行為でもあった。

当会は1967年に「団結道場」と名付けた建物を米軍演習場入口の正面に建設した。ここは、闘争の拠点であると同時に学習の場でもあった。当会にとっての「団結道場」は、自らの平和への願いに向けた態度を建物によって表明するものだった。このように、伊江村内でも集団化が困難な状況において、復帰運動の「外」で「学習」をすることによって、軍用地に反対する「わたしたち」を新たにつくり上げる過程を検討した。

第5章では、前章で考察した「学習」の場が現在いかなる記憶の場・運動の場となっているのかを検討した。伊江島土地闘争は多様な場で作られ、記憶されてきたが、その一つに「わびあいの里」(現一般財団法人)がある。ここは「伊江島土地を守る会」の阿波根昌鴻によって1984年に創設され、「学習」の場の最終地点でもある。先行研究では、わびあいの里は主として反戦平和資料館に焦点が当てられ、阿波根の反戦平和思想および実践の集大成の場として紹介されてきた。しかしながら当資料館は、阿波根独自の思想が表現されている場所であると同時に、資料館を通して複数の人びとの生の痕跡が物語として浮かび上がる場所でもある。

第6章では、前章で取り上げたわびあいの里および反戦平和資料館から見えてくる記憶の場や運動の場に関して、よりパーソナルな領域から検討した。本章で注目した謝花悦子氏は、阿波根と運動を共にした、現わびあいの里の代表理事である。筆者が伊江島で現地調査を始めて8年目になるが、近年、筆者が謝花氏に聞き取り調査をする場所が事務所から台所へと移った。筆者の台所での調査経験をもとに、「歴史をメンテナンスする」(保苺実)作業についてラディカルに考察した。

各章を通して考察した伊江島土地闘争に関わる言葉の居場所は、沖縄の「自」が浮かび上がる言葉の空間でもある。今後の展望として、これらの「自」から沖縄の自治研究および運動史研究の再構築を試みたい。